

「快晴」終了 (メルマガ 2020年2月号)

関東地方、川崎の冬の天気と言えば晴天が続き、雨が少ないのが特徴ですが、今年の1月は雨の降った日がかなりの日数に上りました。「快晴」の青空はほとんど見られなかったように思います。

さて、2月はじめに天気を調べていたところ、インターネット上の地方紙の地元気象台に関する記事で、「快晴」「薄曇」「霰(あられ)」「雹(ひょう)」などの観測区分がなくなると報じられていることに目に留まりました。

令和2年2月3日から、一部を除いた全国の地方気象台・測候所で目視観測が終了し、観測は自動化されるとのことです。関東甲信地方では、すでに2019年2月から自動化されていたようですが、それが全国に拡大されるわけです。

機械で自動的に測定する技術が進歩し、雨量計や気温計などの観測機器、気象レーダー、気象衛星などを使用して、大気の状態を総合的に捉えて測定できるようになったので自動化が図られたとありました。これまでは、職員の方が、毎日、決められた時刻に、晴れや曇りなどの天気、雲の量や種類、見通せる距離などを目で見て観測していたものが、24時間365日連続して観測できるようになり、均一で客観的な観測結果が得られるとのことですので、災害対策などにも一層活用されることを期待したいものです。

一方、自動観測では、空にどれぐらい雲があるかを細かく判別できないため、天気では「快晴」や「薄曇」はなくなり、「晴れ」や「曇り」に統一されることになったとのこと。

目視観測では、例えば、雲の量が空全体の1割以下のときは「晴れ」とは区別して「快晴」とされていました。宮崎日日新聞では、全国トップクラスの「年間快晴日数」などを独自に指標化し、「日本のひなた」をPRしている宮崎県にとって、快晴が消えるのは痛手となりそうだと書かれていました。

その他、大気現象では「雪あられ」「氷あられ」「ひょう」「細氷」「凍雨」「霧雪」「ふぶき」、そして「虹」なども自動化に伴い観測終了となるそうです。言葉自体がなくなるわけではありませんが、「ひょう」や「あられ」はすべて「雨」に区分されるとのこと、人間と機械のそれぞれの能力の違いを面白く感じました。

目視観測が終了となり、細かな気象項目を耳にする機会が減ったとしても、気象についての日本語の繊細で豊かな表現が失われることのないよう、その言葉は大切に使いたいものです。また、肌身で気象の状態を感じられる感覚も磨かねばならないと思いました。

「今日は快晴！」空が快く晴れ渡る。その雲一つない透き通るような青空の美しさは、やはり「晴れ」ではなく、「快晴」が似合うと思いませんか。(N.W)